

のうめき声と水を求める声は絶えない。外に出たら天を焦がす様な煙と炎が悪臭と共に凄い。呆然として悪い夢を見ている様。昨日の朝から何も食べていないが、空腹は感じない。夏の夜は明けた。茄子畑の中で蚊にさされた。負傷者の体も服も血がこびり付いたまま黒ずんでいる。

薄いワンピースが破れて半裸体の娘さん。着る物もない身寄りのない幼児等、顔も体も汚れて真っ黒。放心した様な表情であまり口をきく元気もないらしい。人のことより今の自分をどうすれば良いのか、行くあての無い者、歩く元気も失った人々。気の毒だけどう仕様もない。私も坐ってばかりはいられぬ。時々アメリカ軍の飛行機が低空で来る。悔しいけれど見守るだけで焼野原に座ったまま。十時頃救援物資の乾パンを一袋

もらって、洩れる水道の水を飲んで少し落つく。早く市内脱出をしなければ、また日が暮れると歩き始めた。

八月の日盛り、焼け跡の残り火のほてりで焼けつく様だ。途中の防空壕、防火水槽、川の流れなどに死んだ人がごろごろしている。地獄図絵の道を夕方芸備線の戸坂駅に着いた。その汽車も被災者で車輛の屋根の上まで満員。車内はすし詰で焼けた体の部分は大きく膨れ上り、さけた傷口は膿が湧いてぼろぼろ蛆（うじ）が落ちていた。汗と油と血と膿のすえた様な臭を忘れることが出来ない。まして自分の体に受けた傷の痛みと心の痛手は何十年経た今も消え去りません。こんな事は二度とあってはならない。体験者の私達は核反対を強く叫び続ける。悲願達成の日まで。

ドームは語る

暑い陽差のドームの下を
黙して通る人の群

何を期するか祈るのか

判って欲しい平和への道

自分もその群にいる

黒い自分の影を見つめる

囁の中から聞える叫びを

心はじっと聞いている

やはりドームは何かを語る

被爆者に取りべき道を

俳句

夏草の繁みに悲願の鐘響く

真夏日に彼の日のようにカンナ咲く

原爆忌テレビで参加我も老ゆ

短歌

原爆と知らずに逝きし友偲び

想は遙けき広島島の空